

——「大阪国語教育アセンブリー2014」を終えて——

そもそも「国語科では何を学ぶのか」、「何のための国語教育なのか」といった、真正面からの問いを主題とした昨年を受けて、今年は、「対話で紡ぐことばの学び」について取り組みました。言語活動をすべての教科で、と言われた時、各教科で何ができるのか、という問いかけには、当然、言語活動とは何なのか、という問いかけがついてくる。それに答えを出す、答えは出ないだろうが追いつけるのは、国語科の教師の努めでしょう。

今年のテーマは「対話」。

時間や時代の隔たりを超えた、作品の読みを通じた問いかけと答え、あるいは、同じ時代性の中にあるとしても、空間や置かれた状況の違いを乗り越えた問いかけと答え、それを求め続けるのが国語の授業です。そこに発生する問いかけと答えが、まさしく対話、隔たりや段差を乗り越える対話です。対象との対話、自己との対話、そして他者との対話。これが昨年から今年に受け継がれたテーマでした。

教師がどれだけの問いかけを生徒にぶつけられるか、どれだけ生徒からの問いかけに応えられるか。この、違う世界のぶつかり合いを教師がどれだけ生徒に体験させられるか。問いを投げかけ、問いを投げ返した応酬から立ち上がってくる対話をいかに構築できるか。国語の教師に求められるものは大きい。他教科で、あるいはこれからの生きる現場で活かせる言語の力を養って、将来主体的に生きていけるように成長するのを助けること、これが国語科における言語力の育成なのかなど、さまざまに考えさせられる一日でした。ご協力ありがとうございました。

(大阪府高等学校国語研究会理事長 湯峯 裕)

昨年、多くの方々に支えられて成立した「大阪国語教育アセンブリー」を今年度も引き続いて開催したところ、140名を越える方々にご参会いただきました。国語科教員に加えて高校生、大学生、出版関係者、一般の方々の参加も増え、「自主的」「参会者はことばの教育に関わるすべての人」「本質を問う」という開催コンセプトは、実現しつつあります。今年度もお集まりいただいた方々ひとりひとりが主体的な運営者となり、いきとどかない準備を補って、会を充実したものにしてくださいと感じます。

今年は「対話」をテーマにし、全体会は「対話はどんな力を育てるか」と題しました。パネラーは、大阪府教育委員会教育監の津田仁氏、芥川賞作家の津村記久子氏、そして教員としてご経験豊かな河南高校の林出勝代先生で、本会理事長の湯峯裕先生をコーディネーターに、言わば異種格闘技のような形の「対話」の場となりました。はたして「対話」は成立するだろうかという心配は、開始早々吹き飛びました。林出先生の作品との対話を手がかりに、パネラーのみなさんや真っ先に発言してくれた高校生をはじめとしたフロアのみなさんが言葉を交わし、意義深い対話の場となりました。

分科会は6つ準備しました（ライトノベル分科会も実現しました）。ことばの教育の実践は、指導者の意識にかかわらず、必ず何らかの指導過程を経ます。その指導過程に意識的であることは実践の質を高めることになります。また、指導の目標なしに指導過程はあり得ません。みなさんが書かれた感想から、分科会がみなさんにとって、ことばの教育の目標と指導過程の関係を再確認し、両者を鍛えるヒントになったと感じます。

今年は昨年度と比較して、教員以外の方々の参加割合が増しました。「大阪では立場を越えてことばの教育について話し合う場があり、そこでみんなが対話している」ということを参加されたのみなさんに実現していただいたように思います。そのみなさんの真摯な発言と感想に支えられ、「大阪国語教育アセンブリー」は、来年を迎えたいと思います。

(大阪府立今宮高校 小山秀樹)